
ラブカクテルス その3 6

風 雷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブカクテルス その36

【Nコード】

N2292D

【作者名】

風 雷人

【あらすじ】

今宵は懐かしのナンバーを聞きながら飲むカクテルはいかがですか？ご賞味あれ。

いらっしやいませ。

どうぞこちらへ。

本日はいかがなさいますか？

甘い香りのバイオレットフィズ？

それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？

はたまた、大人の香りのマティーニ？

わかりました。本日のスペシャルですね。

少々お待ちください。

本日のカクテルの名前は真夜中ラジオでございます。

ごゆっくりどうぞ。

俺はトラックドライバー。

なんの因果か、この国の端から端までを走り回っている。

知らない道なんてないくらいだ。

大体住所をみれば地図を見なくても辿り着ける。それくらい一年中あちこちに行っているのである。

商売とは言え、かなり酷な仕事だ。

俺は会社に借りてもらっている借家に住所があるが、そこに帰るのは一年通して十日間くらい。

ほとんどが車の中での寝泊まりだ。

相方はいるが、昼間は奴が運転で俺が寝ている。そして夜はその反対。

だから同じ車内にいてもあまり話さないし、酒を飲む訳にもいかな

いので、ぶつちやけた会話もない。
ほとんど運転は一人で、相手はラジオだ。

でも、ラジオは各地域にしか電波がないために、その境ではよく途切れて、話しの良いところが聞けない事がよくある。
そんな時は一人の寂しさをふと、感じるのだった。

今日は北の方から南に向かう。

夕飯は少し量を控えて食べる。なぜなら腹がいっぱいになってしま
うと、直ぐに眠くなってしまうからだった。

相方は腹いっぱい飯を食っていた。

それは逆にぐっすり寝るためで、俺達には必要な事だった。

そしてきつと、もう耳栓をして後ろの狭いスペースに寝転がってい
るに違いない。

そして俺はブラックの缶コーヒーを買い込んでトラックに飛び乗っ
た。

エンジンはゴウゴウと黒い煙を吐き散らす。

唸りを上げさせて、俺はクラッチをゆっくり切りながら、タイヤに
力を伝えた。

トラックは大きい車体をヨイショツと言わんばかりに走り出させた。

高速道路は俺達のレールだ。

嫌でもお世話になるほかない、運送業の生命線。

山をくぐり、海を渡り、地下に潜り、ビル間を抜ける。

しかし、ほとんどの街中意外の風景は代わり映えのない、外灯の照
明が点線の帯を連ねる退屈な暗い世界。

俺はラジオを付けて、いつものように気を紛らわせた。

軽快なリズムの音楽にが耳につく。

少し様子を伺って聞いてみる。

聴き憶えのない曲だが、ハンドルを握る片手を少し弛めて、指を曲に合わせて踊らせてみた。

しかし、そこまで止まりの曲だ。

ある程度聴いても、あまり浮き沈みがない曲調は、段々と退屈を呼んだ。

俺はチャンネルを次に変えた。

微かな雑音の後に、今度は話し声が聞こえてきた。男の声だ。

何について話しているか耳を傾けてみた。しかし、この頃できたテーマパークの宣伝らしく、どんな乗り物がなんだとか、シーズンの企画がどうなどと、実際にその語り手が触れた感想などを盛り込んで話していたが、直ぐにCMになり、それが長くて、またすぐにチャンネルを変える羽目になってしまった。

次の番組は難しい話しが続く教育系の番組だったので飛ばした。

あれを聞いていると、かなり眠気が水を射してくる。

そして次に受信した局は女のDJの番組だった。

聞いている内容からして、彼女は新人の歌手らしく、最近やったライブの話なんかをしていた。

そして新しく出した新曲を流すと言うので、その甘い声から期待して耳を傾けると、スローな前奏が心地よく、そして歌声が聞こえてきたと思った瞬間、雑音へと変わった。

電波が途切れたのだ。

俺は何だよと、ハンドルを軽く叩いた。

全く、少し聴き入ると毎回そうだ。

俺はまた直ぐにチャンネルを回した。

幾つかの雑音が続いて、俺は少し顔をしかめていたが、何とか途切れ途切れで、何かの音楽が聞こえてきた。

しかしこの辺は丁度、山と山の平野地帯。そしてすぐ脇に海が見え

るところだが、確かここいら辺はいつも何処からも電波を拾えなくなるところで、ラジオは雑音まみれの末に電源を切ってしまう場所だった。

それが分かっているにも、一応ラジオを回してしまうのだが。

しかしどこかの電波が気象によって、かなり遠くから聞こえてくることがあると聞いた事があるが、それなのだろうか？

音は段々はつきり聞こえるようになってきた。

そしてその音楽は聴き覚えのある懐かしいナンバーだとわかった。

俺は途端に気分がよくなり、鼻歌まで出てしまった。

少年期によく聞いた異国のナンバーだった。

しかしこの曲は最近はただただ、普通に流れていて何の不自然さもない曲で、しかもイメージはかなりの待遇。

こんな感じのナンバーなら誰でも当たり前前に好む曲だが、昔は違っていたことを思い出させる。

俺は早くからこのリズムに目覚めて、いいものだと感じていたが、その当時の大人達には冷たい視線を浴びせられて、聴いてる俺も不良扱いされた。

刺激的なものは拒絶される時代があったのを思い出したのだった。

俺はあの頃からどこから外れ出した気がする。

何が良いと何が悪いかわからない大人達が、あれもダメこれもダメだといいいながら、俺を縛りつける事がとても不快だった。

だからそれは反抗となって現れて親達や、大人達、普通の環境で暮らしたい奴をことごとく傷付ける事になった。

俺は悪のレッテルを貼られて、次第にその手の奴らと付き合いようなくなった。

そして反発の日々が続いたのだった。

そんな事をくすぶりながら考えていると、聞き覚えのない言葉がラジオから聞こえてきた。

それはとても低い声で、落ち着いた霧囲気をかもし出していた。

とても短い語りだったが、なぜか哀愁みたいなものが漂うように思え、解らないながらも耳を傾けていると、その直ぐ後にまた、曲が続いて流れ出した。

そしてその曲も聴き憶えがあるもので、前奏を聴いた途端に俺の心は踊った。またも氣に入っていたあの当時のヒット曲だった。

確か何週間もNo. 1になったあの年代を代表すると言っても過言じゃない名曲だった。

俺は一人で嬉しくなつて顔を弛めた。

大袈裟な話かも知れないが、さっきの思い出の残像がまだ頭から離れていなかったせいで、今になつて認められているこの音楽達の現実が俺を勝ち誇らせたのだった。

どうだ、あの時の俺の感じたものは確かだったじゃないか。

そして俺はこの歌われている曲の言葉や内容も、ろくに理解していないのに、聞こえてくるがままの解釈で適当に歌った。

突き抜けるようなギターのサウンドは、俺の心に、忘れていた稲光にも似た衝撃を叩き込み、俺の中のブレーカーはいきなり上げられ、体が勝手に弾み出していた。そしてセーブしていたアクセルを思いっ切り踏み込んだ。

車体は急な加速に振動を伴いながらエンジンを唸らせた。

曲はクライマックスに入り、ボルテージが騰がりばなしで次の曲に移っていった。

今度はスローテンポのバラードで、これも聴き憶えがあった。

俺はスローテンポなのにも関わらずにテンションを下げられずに、また適当に歌い出した。

なぜならこの曲には、格別な思い入れがあったからだ。それは初恋のあの子にクリスマスプレゼントでレコードを送った曲だったからだ。

その時の思い出がまた鮮明に蘇ってきた。
甘く酸っぱく切ない思い出だった。

俺は同じクラスにいたその子とはあまり口を聞いた事がなかったが、ある時学校の休み時間に、その頃あまりメジャーではない音楽雑誌を広げ、今流れているこの曲を歌う歌手のインタビューに目を通していた。

誰にも分かりっこないこの記事は、当時の俺にはかなりの話題が書かれていて、その時の俺の表情はかなり真面目だった。

俺の斜向かいに席があるその子は、そんな俺の顔を見てクスクスクスと笑っていた。

俺は自分を見て笑っている事が少しカチンときたが、その子が近寄ってきて、雑誌の歌手を知っていて、しかもその曲までをいい曲だと言つので、急に俺から怒りが消えて、嬉しさに変わった。

そして、見せて見せてと顔を俺の前に突きだしてくるその子の香りが、俺の頬をピンクに染めたのだった。

その子はそれを見てまたクスクスクスと笑い、俺は照れ隠しに雑誌を閉じたのをよく憶えている。

その子はそれから、俺に赤面君などと、変なあだ名を付けていちいち絡んできたが、それは実は満更でもなかったのだった。

俺はその内に、その子とよく話をするようになったし、それが学校に通う数少ない理由の一つとなった。

そしてその年のクリスマススの日に俺は思い切ってデートに誘った。

その子はOKしてくれ、飛び上がりたい気持ちを必死で抑えたせいで、なぜか顔が赤くなり、その子にからかわれたのを思い出した。

俺は興奮して、どこに行くかを考えたが、やはりそれは一つしかなかった。そう、あの曲が主題歌になっていた、その頃の大ヒット映画だった。

俺はバイトを始めて二人分のチケットと、主題歌のレコードを買っ

た。

そしてクリスマス、俺は幸せだった。これが恋なのだと感じた。その日は何を聞いても何を見ても心の一部になって、俺に刻まれていった。

その子は帰り道に、手渡したレコードを宝物に言った。

俺は嬉しかった。

そして別れ際に、その子は俺にもプレゼントをくれると言って、少し背伸びをして俺の顔に顔を近付けてきた。

そして俺のファーストキスは甘い味として残った。

しかし、所詮は初恋。俺達は、進級するまでは一緒にいたが、春を迎えてクラスが別々になると、どちらともなく声を掛けなくなり、段々自然にただの友達に戻ったのだった。

でもきつと原因は、あれから俺がはつきりと付き合うという行動に出ずに、その頃に夢中になったバイクで男連中とばかりいたのがいけなかったのだろう。

俺はあのキスで、その子はもう自分の彼女になったのだと、勝手に解釈してしまい、相手の事を考えるくらいの優しさなんてわからなかった。

まだ子供だったのだと、今になって判る。

俺は頬を赤くしたのだった。

それからギクシャクした男女関係と、周りからの勝手な想像の攻撃に、俺は面倒くさくなり、卒業してしばらくしても彼女というものを作らなかった。

そしてそんな懐かしい頃の曲が、更に三曲続き、俺は完全に自分の若かった時代にタイムスリップしていた。

その後にもまたあの、低い声の主が何かを語っていた。

その語りはため息混じりでかなり憂鬱な雰囲気だったが、全く馴染みのない言語で、何も理解出来なかった。

そして、少しの沈黙の後にまた曲が聞こえてきた。

その曲も思い入れがある、嬉しいナンバーで俺は思わずほころんだ。

このレゲエのナンバーは、俺が初めて貰った給料でローンを組んで買った、初の愛車の中でよく聴いた曲だった。

小さい、四人も乗るといっぱいになるその車は、安いステレオを自分で付けて、それを大音量で鳴らして、男連中と宛てもなく、夜中から朝方までドライブしたのが脳裏に浮かんできた。

しかし、なぜこんなに俺のお気に入りの曲ばかりがかかるのか、まるで俺のために誰が流してくれているとしか思えてならなかった。

俺は何か不思議なものに包まれている気がしたが、そんな事を思っている矢先、ラジオからは雑音がひどくなり、やがて音楽は聞こえなくなってしまった。

俺は慌ててラジオの曲番号をチェックしたが、後々に探してみたところ、その番組を見つける事はできなかった。

やはりどこか遠い異国の放送曲からの迷い電波だったのか？

俺はそれから幾度か、その近くに来る度に例の番号にチャンネルを合わせてみたが、二度とその番組がラジオから聞こえてくることはなかったのだった。

俺はなぜか、それからしばらくしてその会社の仕事を辞めた。

何だか、あのラジオであの曲達を聴いてから、もっと生活に生きている実感が持てる時間が、俺には必要だと思ったからだった。

何のために、なぜそこまでして働くのか？

それで何をしたいのか？

それを考えずに俺は流されるままに働いている自分を見直そうと思っただけかも知れない。

確かに、それは誰がやらなければいけない仕事で、辞める事で俺はそこから逃げる形になるのかもしれない。

でも俺は仕事をするために生きているんじゃない。生きるために仕事をするのだと感じ、それをあのラジオから流れていた曲達に気付かされた。そんな気がしたのだった。

それから俺は、何社かの会社、仕事を転々としてしまったが、今はやはり運転手だが、時間にちゃんとした余裕が持てるところに腰を下ろして、当たり前の日々の中、また新しい色々な思い出を作っている。

お気に入りのラジオを聴きながら。

自分は海軍に所属している。

今回、極秘任務に着いて、潜水艦に乗り込んでいたが、敵の攻撃を受けて潜水艦は沈んでしまった。

極秘の作戦のために、緊急の救助信号を送れずにただただ死を待つばかりになってしまった。

他の乗組員は脱出艇に乗って、残りの任務のために生き延びたはずだ。

自分はこの艦の操縦士だったため、敵を誘き寄せるために囷として逃げるのが最期の任務となったが、運がいいのか、何とか敵を巻いて、そして潜水艦は力尽きて沈んだのだった。

ここにはもう、酸素があまりなく、自分の命は多分そんなに長くない。

俺は潜水艦に積んでいたお気に入りの音楽が入っているテープをポケットから出した。

そして、救助信号を送らない代わりに、その曲達をFM無線に乗せて流した。

自分の最期のあがきだった。

死ぬ時位は思い出の音楽にひたりながら死にたいと、命の危険を感じ

じる度に思うようになっていたせいで、いつも任務に出る時はこのテープがポケットに入れてあり、いままではこれがお守りみたいなものだったが、今回は本来の目的のために役に立つ事となってしまうた。

自分は曲の合間合間に、その曲と自分との思い出を少し語ってみた。誰が聴いているかは解らないが、涙を堪えるには役に立った。そしてテープが終わりに近づくと、自分の意識も終わりに近づいていくようだった。

自分は思った。これまでの自分の人生はこれで良かったのかと。もし、違う人生だったなら、こんな曲をどこで聴いていたのだろう。そして何を感じていたのだろうか？
薄れ行く意識の中で、ほんの少し流れてしまった涙が、頬を伝う感覚はもう自分には無くなっていたのだった。

おしまい。

いかがでしたか？

今日のオススメのカクテルの味は。

またのご来店、心よりお待ちしております。では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2292d/>

ラブカクテルス その36

2010年10月10日20時21分発行